

【日本史 B】 大学入学共通テスト試行調査(プレテスト)所見 (平成 29 年 11 月実施)

教材研究センター地歴公民研究室

◎ 試験概要 ◎

配 点 : 100 点

試験時間: 60 分

◎ 出題における特徴的な点 ◎

- 現行のセンター試験より設問数は減ったが(36 問→30 問)、思考させる問題が多いために取り組みにくく、時間的な余裕はないと思われる。
- すべての問題ではないものの、基本的には「歴史の見方の多様性」というテーマのもと、作題を行っている傾向が見られる。
- 生徒による発表形式や「カード」形式を新しく採用している。高等学校で行われているようなグループ学習の反映か。
- 知識に依らずに視覚資料の読み取りにより解答させる問題が、現行のセンター試験よりも多い。
※現行のセンター試験でも視覚資料は比較的多いが、いわゆる「知識問題」が一般的な出題の仕方である。

◎ 大問ごとの分析 ◎

第1問(【古代～中世】「会議」「意思決定」の方法)

- ・生徒たちの学習活動の成果としての「発表資料」をもとに、各設問が構成されている。現行のセンター試験以上に、資料の読み取り能力が求められている。
- ・問1…発表資料を読み、その分析として正しいものを選ぶ問題。資料を読まないと、解答しにくい。
- ・問4…発表資料の内容のイメージ図として正しいものを選ぶ問題。資料を精読して頭や紙面でイメージ図を描いてから、それに近いものを選択しなければならず、知識よりも思考力が試されている。

第2問(【古代】邪馬台国、「日本」の国号)

- ・第1問と同様に「発表資料」の形式をとっているものの、現行のセンター試験のような文章型のリード文に近い。
- ・美術作品の写真が7点あり、そのうち4点(問4の選択肢)は各作品が何かを知っている必要がある。
- ・問2…邪馬台国の史料に登場する下層民(「下戸」)や役人(「大夫難升米」)の「考え」を選ぶ問題。いわゆる心情問題に近く、想像力が求められている。

第3問(【古代～中世】下地中分図、仏堂の構造と仏像の配置の変化)

- ・下地中分と寺院に関するテーマで、全大問の中で一番良質な大問であった。図版の読み取りだけでなく、歴史の流れを把握しているかを問う問題もあり、難度は高い。
- ・問1…下地中分が行われた時期を、時系列順に並んだ4つの文の前後から選ぶ問題(「AとBの間」など)。4つの文に時期を特定するキーワードがあまりなく、中世の土地制度史をよく理解していないと難しい。
- ・問4…3つのカードに示される内容を参考に、仏堂の構造・仏像の配置の変遷を考える問題。カードに示された変化と、選択肢の模式図とを照合する作業は、なかなか骨が折れる。

第4問(【近世】中世・近世の大名の比較、昆布の流通)

- ・近世に関する大問で、一部表やカードが用いられているが、基本的には現行のセンター試験に近いといえる。
- ・問2…「近世の大名が江戸好きであった」という資料のもとに立てた仮説として誤っているものを選ぶ問題。上米の制の内容をよく理解していなければ、どの選択肢も正しく見えるであろう。
- ・問4…那覇市を基準に近世の流通を考える問題。当時の流通網の地図をイメージできなければ取り組みにくい。

第5問(【近代】幕末の動向、立憲政治の成立過程)

- ・幕末の年表と、明治時代前期の政治動向に関する図が提示されている。問2と問3は問題形式こそ違いますが、今回の試行調査におけるテーマと思われる「歴史の見方の多様性」を如実に表しているといえる。
- ・問2…条約交渉における幕府の対応についての2つの評価があり、その根拠をそれぞれ選ぶ問題。相反する2つの評価が存在するというのは、受験生にとっては意外だったのではないか。
- ・問3…各登場人物が取り上げた幕府滅亡への画期について考える問題。どちらの考えを支持するかによって正答が変わるというのは現行のセンター試験になく、この問題形式自体が「画期」といえるだろう。

第6問(【近現代】近現代の経済・社会)

- ・近現代の統計データや絵画作品をもとに、各設問が構成されている。一部特殊な問題形式が見られるものの、基本的には現行のセンター試験と大差なく、純粋に知識を問う問題も多い。
- ・問4…絵画作品とそれに関する資料を読み取る問題で、それらを読まなければ解答できないようになっている。なお、6つの選択肢の中から正しいものを2つ選ぶ形式は、現行のセンター試験にはない(ただし、国語には存在する)。